

日本航海学会誌

NAVIGATION

21世紀の新しい針路を求めて

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定

— その3 : 半没円柱に対する証明 —

堀 勉

*A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy
Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure
— Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —*

Tsutomu HORI

平成31年

4 月

第208号



研究・調査

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定

— その3 : 半没円柱に対する証明 —

堀 勉

A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —

Tsutomu HORI

キーワード: 浮心, 圧力中心, 静水圧, 半没円柱, 矩形断面

1. はじめに

船に作用する浮力の中心「浮心」は、水面下の体積（排水体積）を水で置き換えた重心（即ち、水面下の幾何学的形状の体積中心）に等しいことは、造船学上、否、物理学上の周知の事実である。

Archimedes の原理⁽¹⁾が教える浮力は、静水圧の圧力積分によって明かに求められるが、浮心位置については、物理学や水理学、造船学や航海力学など、どの教科書（例えば、第1報⁽²⁾の参考文献(2)~(16)）にも、水面下の体積を水で置き換えた重心位置であると記述されていて、静水圧による圧力中心としての説明は見当たらない。

そんな状況の中、10年ほど前、小松⁽³⁾によって、「浮心≠圧力中心？」の問題提起が成され、日本船舶海洋工学会の推進性能・運動性能合同研究会等でも、瀬戸^{(4),(5)}、鈴木(勝)⁽⁶⁾、小松⁽⁷⁾、藪下⁽⁸⁾、慎⁽⁹⁾らによって、活発に議論が成された。

この問題に対して、著者は、この航海学会誌上で、第1報⁽²⁾と第2報⁽¹⁰⁾において、船を θ だけ横傾斜させた状態で、静水圧を圧力積分して、作用する力とモーメントを計算することにより、傾斜時の圧力中心を決定した。その結果を、 $\theta \rightarrow 0$ とすることで、圧力中心が、水面下の図心、即ち、周知の浮心に位置することを、矩形断面⁽²⁾に続いて、任意の横断面形状⁽¹⁰⁾について証明した。

この問題については、一色⁽¹¹⁾や藪下⁽¹²⁾は、重力の作用方向を、鉛直方向から傾斜させることにより、「浮心=圧力中心」であることを示した。その後、藪下⁽¹³⁾は、浮体や重力の作用方向を傾斜させるのではなく、座標系を回転させることで、同様の結論が得られることを示した。一方、鈴木(勝)⁽¹⁴⁾や小松⁽¹⁵⁾が、種々のアプローチで、この問題に対して検討を加える中、著者の証明⁽¹⁶⁾に対しても、半没円柱の場合でも、同様の結論でしょうか？とのご意見が、何人かの先生方から寄せられた。

半没円柱の場合も、第2報⁽¹⁰⁾の任意形状の証明に含まれるものであるが、矩形と共に典型的な断面形状であるので、ここに改めて第3報として、ご報告させて頂く次第である。

2. 半没円柱の圧力中心 C_p の位置決め

図1は、半径 R の半没円柱（幅 $2R$ ，吃水 R ）の横断面が、右舷側に θ だけ横傾斜した場合を示す。静水面中央に原点 o を置き、 z 軸を鉛直下向きに取った空間固定座標系を $o-xyz$ ，円柱に固定した座標系を $o-\eta\zeta$ とする。

ζ 軸から反時計方向に測った偏角を ϕ とするとき、図中に示すように、左舷側の水面位置の偏角 ϕ_L と、右舷側の水面の偏角 ϕ_R は、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} \phi_L &= -\frac{\pi}{2} + \theta \\ \phi_R &= \frac{\pi}{2} + \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(1)$$

となる。このとき、空中部 C_{air} と没水部 C_{water} は、偏角 ϕ で記述すると、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} C_{air} &: \frac{\pi}{2} + \theta \leq \phi \leq \frac{3\pi}{2} + \theta \\ C_{water} &: -\frac{\pi}{2} + \theta \leq \phi \leq \frac{\pi}{2} + \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(2)$$

である。円柱表面 $(\eta, \zeta) = (R \sin \phi, R \cos \phi)$ での水深 $z(\phi)$ は、

$$\begin{aligned} z(\phi) &= (\zeta + \eta \tan \theta) \cos \theta \\ &= (R \cos \phi + R \sin \phi \cdot \tan \theta) \cos \theta \\ &= R(\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \quad \dots\dots\dots(3) \end{aligned}$$

である。このとき、円柱表面に立てた、外向きの

単位法線ベクトル \mathbf{n} は、偏角 ϕ を使って、

$$\begin{aligned} \mathbf{n} &= n_\eta \mathbf{j} + n_\zeta \mathbf{k} \\ &= \sin \phi \mathbf{j} + \cos \phi \mathbf{k} \quad \dots\dots\dots(4) \end{aligned}$$

のように書ける。ここに、 n_η, n_ζ は、それぞれ、円柱固定座標 η, ζ に対する方向余弦を意味する。

大気圧を p_0 、水の比重量を γ とし、図1で、大気圧を破線、静水圧 γz を実線のベクトルで示していて、全て、円柱表面に対して垂直な $-\mathbf{n}$ 方向に作用する。

2.1 円柱表面に働く圧力による力

円柱表面に働く、圧力による $-\eta$ 方向の力 $F_{-\eta}$ と $-\zeta$ 方向の力 $F_{-\zeta}$ は、空中部 C_{air} に働く大気圧 p_0 による力と、没水部 C_{water} に働く静水圧 $p_0 + \gamma z$ による力の和で、それぞれ、

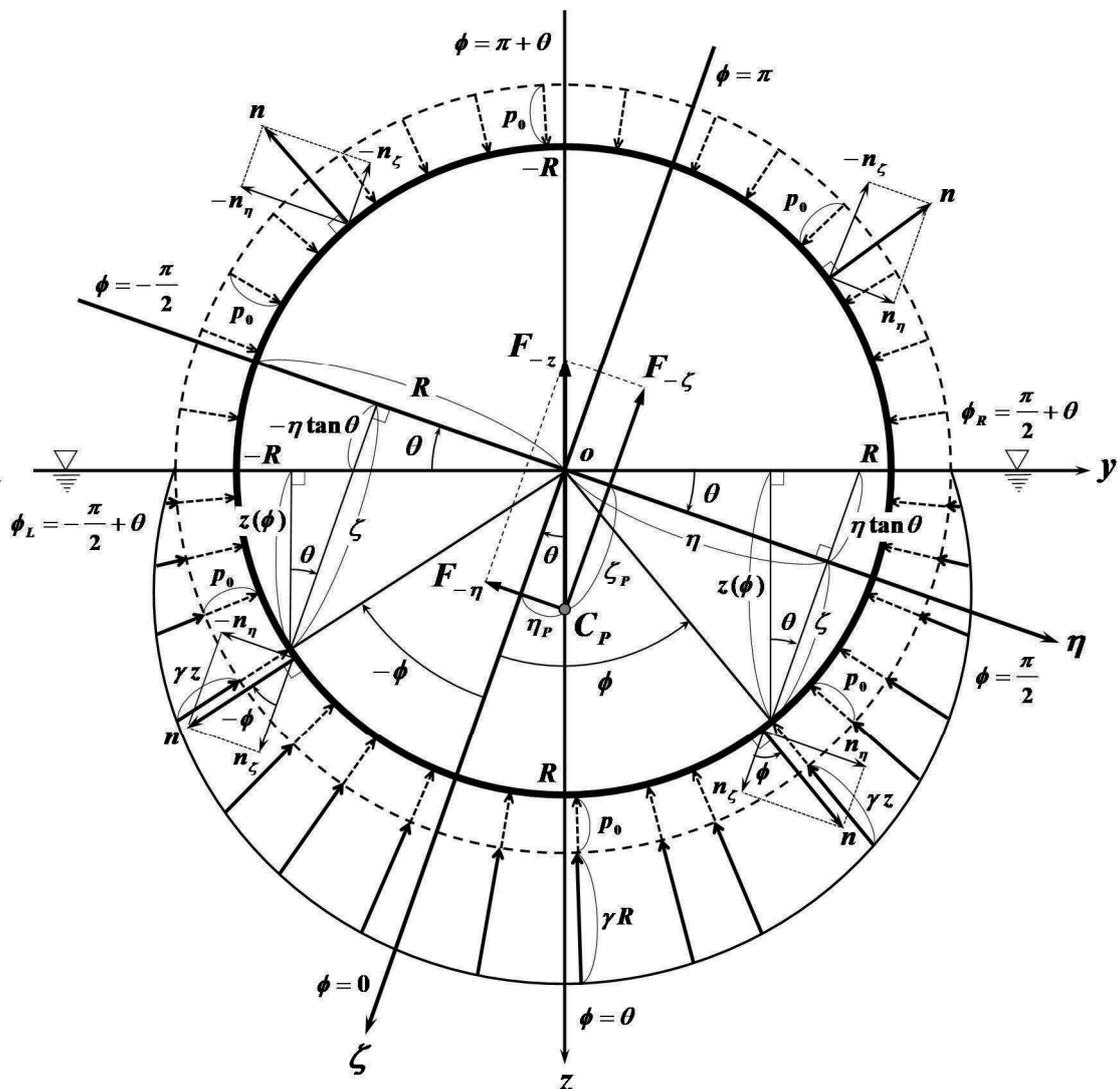


図1 横傾斜した半没円柱に作用する静水圧の分布と圧力中心

$$\left. \begin{aligned} F_{-\eta} &= \int_{C_{air}} p_0 n_\eta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) n_\eta d\ell \\ F_{-\zeta} &= \int_{C_{air}} p_0 n_\zeta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) n_\zeta d\ell \end{aligned} \right\} \dots(5)$$

によって求まる。ここに、円柱表面では、線素は $d\ell = R d\phi$ 、 η 方向と ζ 方向の方向余弦は、(4)式により $n_\eta = \sin \phi$ 、 $n_\zeta = \cos \phi$ と書けるから、 C_{air} 、 C_{water} それぞれに対し、(2)式の区間で、偏角 ϕ に関する積分で表記できる。

実際、 $-\eta$ 方向に働く $F_{-\eta}$ は、

$$\begin{aligned} F_{-\eta} &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \sin \phi \cdot R d\phi + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \sin \phi \cdot R d\phi \\ &= p_0 R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin \phi d\phi + \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \sin \phi d\phi \\ &= \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin \phi d\phi \dots\dots\dots(6) \end{aligned}$$

のように、 $-\zeta$ 方向に働く $F_{-\zeta}$ は、

$$\begin{aligned} F_{-\zeta} &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \cos \phi \cdot R d\phi + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \cos \phi \cdot R d\phi \\ &= p_0 R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \cos \phi d\phi + \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \cos \phi d\phi \dots\dots\dots(7) \end{aligned}$$

となり、 $F_{-\eta}$ 、 $F_{-\zeta}$ とともに、第 1 項の大気圧 p_0 に関する円柱表面の全周に亙る積分はゼロとなり、力に寄与しないことが分かる。よって、第 2 項の水深 $z(\phi)$ に、(3)式を用いて計算すればよいことになり、 $F_{-\eta}$ は、

$$\begin{aligned} F_{-\eta} &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \sin \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin \phi \cos \phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin^2 \phi d\phi \right\} \\ &= \frac{1}{2} \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (1 - \cos 2\phi) d\phi \right\} \\ &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} \sin \theta \dots\dots\dots(8) \end{aligned}$$

となり、 $F_{-\zeta}$ は、

$$\begin{aligned} F_{-\zeta} &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (\cos \theta \cos \phi + \sin \theta \sin \phi) \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \left\{ \cos \phi \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \cos^2 \phi d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin \phi \cos \phi d\phi \right\} \\ &= \frac{1}{2} \gamma R^2 \left\{ \cos \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (1 + \cos 2\phi) d\phi \right. \\ &\quad \left. + \sin \theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \right\} \\ &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} \cos \theta \dots\dots\dots(9) \end{aligned}$$

のように、求まる。両式中で、 $\sin 2\phi$ の積分値はゼロ、 $(1 \mp \cos 2\phi)$ の積分値は π となるからである。

2.2 円柱表面に働く圧力によるモーメント

円柱表面に働く $-\eta$ 方向の圧力による、原点 o に関する時計回りのモーメント M_η と、 $-\zeta$ 方向の圧力による、反時計回りのモーメント M_ζ は、それぞれ、(5)式にモーメントのレバーとして、 ζ 或いは η を乗じて積分することにより、

$$\left. \begin{aligned} M_\eta &= \int_{C_{air}} p_0 \zeta n_\eta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) \zeta n_\eta d\ell \\ M_\zeta &= \int_{C_{air}} p_0 \eta n_\zeta d\ell + \int_{C_{water}} (p_0 + \gamma z) \eta n_\zeta d\ell \end{aligned} \right\} (10)$$

によって求め得る。ここに、前節の $F_{-\eta}$ 、 $F_{-\zeta}$ に対する(6),(7)両式と同様に、偏角 ϕ に関する積分で表記すれば、 M_η は、

$$\begin{aligned} M_\eta &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \sin \phi \cdot R \cos \phi \cdot R d\phi \\ &\quad + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \sin \phi \cdot R \cos \phi \cdot R d\phi \\ &= \frac{1}{2} p_0 R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \\ &\quad + \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z \sin \phi \cos \phi d\phi \\ &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin \phi \cos \phi d\phi \dots\dots\dots(11) \end{aligned}$$

となり、 M_ζ は、

$$\begin{aligned}
 M_\zeta &= \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} p_0 \cos\phi \cdot R \sin\phi \cdot R d\phi \\
 &\quad + \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} (p_0 + \gamma z) \cos\phi \cdot R \sin\phi \cdot R d\phi \\
 &= \frac{1}{2} p_0 R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin 2\phi d\phi \\
 &\quad + \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} z \sin\phi \cos\phi d\phi \\
 &= \gamma R^2 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} z(\phi) \sin\phi \cos\phi d\phi \quad \dots\dots\dots(12)
 \end{aligned}$$

となることから、 M_η, M_ζ に関する両式は、同値となることが分かった。

(11),(12)式ともに、第1項の大気圧 p_0 に関する $\sin 2\phi$ の積分はゼロとなり、第2項の水深 $z(\phi)$ に、(3)式を用いることにより、

$$\begin{aligned}
 M_\eta &= M_\zeta \\
 &= \gamma R^3 \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} (\cos\theta \cos\phi + \sin\theta \sin\phi) \\
 &\quad \times \sin\phi \cos\phi d\phi \\
 &= \gamma R^3 \left\{ \cos\theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin\phi \cos^2\phi d\phi \right. \\
 &\quad \left. + \sin\theta \int_{\frac{\pi}{2}+\theta}^{\frac{3\pi}{2}+\theta} \sin^2\phi \cos\phi d\phi \right\} \dots\dots\dots(13)
 \end{aligned}$$

を計算すればよいことになる。実際、第1項は $p = \cos\phi$ 、第2項は $q = \sin\phi$ と置いて、それぞれ置換積分すれば、

$$\begin{aligned}
 M_\eta &= M_\zeta \\
 &= 2\gamma R^3 \left(\cos\theta \int_0^{\sin\theta} p^2 dp + \sin\theta \int_0^{\cos\theta} q^2 dq \right) \\
 &= 2\gamma R^3 \left(\cos\theta \cdot \frac{1}{3} \sin^3\theta + \sin\theta \cdot \frac{1}{3} \cos^3\theta \right) \\
 &= \frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta (\sin^2\theta + \cos^2\theta) \\
 &= \frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta \quad \dots\dots\dots(14)
 \end{aligned}$$

のように、求まる。

2.3 -y 方向と -z 方向の合力 F_{-y}, F_{-z}

2.1節(8),(9)式で求めた $F_{-\eta}, F_{-\zeta}$ を用いて、水平成分の F_{-y} と、鉛直成分の F_{-z} を求めると、

$$\left. \begin{aligned}
 F_{-y} &= F_{-\eta} \cos\theta - F_{-\zeta} \sin\theta \\
 &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} (\sin\theta \cdot \cos\theta - \cos\theta \cdot \sin\theta) = 0 \\
 F_{-z} &= F_{-\zeta} \cos\theta + F_{-\eta} \sin\theta \\
 &= \gamma \frac{\pi R^2}{2} (\cos^2\theta + \sin^2\theta) = \gamma \frac{\pi R^2}{2}
 \end{aligned} \right\} (15)$$

のように、圧力積分による合力として、水平成分 F_{-y} は生じないことが分かる。

鉛直成分 F_{-z} は、水の比重量 γ と水面下の半円の面積 $\frac{\pi R^2}{2}$ の積となっていて、Archimedesの原理⁽¹⁾が教える通り、鉛直上向きに生じる浮力そのものである。

2.4 半没水円柱の圧力中心 C_p の位置決め

圧力中心 C_p を円柱固定の $o-\eta\zeta$ 座標系で、位置決めするには、第1報⁽¹⁾、第2報⁽¹⁰⁾と同様に、大串⁽¹⁷⁾が用いた水理学の手法に基づいて、 η 座標 η_p は、 $-\zeta$ 方向の圧力による合力 $F_{-\zeta}$ とモーメント M_ζ により、(9),(14)式を用いて、

$$\begin{aligned}
 \eta_p &= \frac{M_\zeta}{F_{-\zeta}} = \frac{\frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta}{\gamma \frac{\pi R^2}{2} \cos\theta} \\
 &= \frac{4}{3\pi} R \sin\theta \quad \dots\dots\dots(16)
 \end{aligned}$$

のように、 ζ 座標 ζ_p は、 $-\eta$ 方向の圧力による $F_{-\eta}$ と M_η により、(8),(14)式を用いて、

$$\begin{aligned}
 \zeta_p &= \frac{M_\eta}{F_{-\eta}} = \frac{\frac{2}{3} \gamma R^3 \sin\theta \cos\theta}{\gamma \frac{\pi R^2}{2} \sin\theta} \\
 &= \frac{4}{3\pi} R \cos\theta \quad \dots\dots\dots(17)
 \end{aligned}$$

のように計算することができ、

$$(\eta_p, \zeta_p) = \left(\frac{4}{3\pi} R \sin\theta, \frac{4}{3\pi} R \cos\theta \right) \quad \dots\dots(18)$$

のように決定される。この円柱固定座標での (η_p, ζ_p) を、空間固定座標の (y_p, z_p) に変換すると、

$$\left. \begin{aligned} y_p &= \eta_p \cos \theta - \zeta_p \sin \theta \\ &= \frac{4}{3\pi} R (\sin \theta \cdot \cos \theta - \cos \theta \cdot \sin \theta) = 0 \\ z_p &= \zeta_p \cos \theta + \eta_p \sin \theta \\ &= \frac{4}{3\pi} R (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) = \frac{4}{3\pi} R \end{aligned} \right\} \dots(19)$$

のように計算され、

$$(y_p, z_p) = \left(0, \frac{4}{3\pi} R \right) \dots\dots\dots(20)$$

となる。これは、正しく水面下の半円のセンターライン (z 軸) の図心位置を示しており、第 2 報の任意の断面形状に対して得られた結論⁽¹⁰⁾と一致する。これによって、半没円柱についても、圧力中心が、周知の浮心位置であることを、証明できた。

2.5 考察

本章の半没円柱の場合は、矩形 (第 1 報⁽²⁾) や任意の断面形状 (第 2 報⁽¹⁰⁾) の場合と状況が異なり、横傾斜させても、水面下の幾何学的形状が、変化しないことである。結果、横傾斜角 $\theta \rightarrow 0$ として、直立時の圧力中心を求める必要がなく、前節(20)式のように、圧力中心の位置を定め得た。

このことは、藪下ら⁽¹³⁾が主唱するように、浮体を横傾斜させることなく、座標系を回転させて、鉛直方向からズラすことにより、鉛直方向の浮心位置を決め得ることを、例証している。

3. 矩形断面に対する別証明

2.5 節の考察を踏まえて、第 1 報⁽²⁾の矩形断面の場合に対して、浮体を傾斜させることなく、座標系を回転させる手法で、圧力中心の位置決めを試みる。

図 2 は、幅 $2b$ 、深さ $f+h$ (吃水 f 、乾舷 h) の 2 次元 矩形断面が、直立状態で浮いている場合を示す。底面中央に原点 o を置き、水平方向と鉛直上向きに取った座標系を $o-yz$ 、原点 o を中心に、時計回りに θ だけ回転させた座標系を $o-\eta\zeta$ とする。

図 1 と同様、大気圧を破線、静水圧を実線、それぞれの圧力を細線、力を太線のベクトルで示し

ていて、全て、浮体表面に対して垂直方向に作用する。

3.1 浮体表面に働く圧力による力

左舷 (*Left*)、右舷 (*Right*) に働く力 P_{Left}, P_{Right} は、それぞれ舷側全体に働く一様分布の大気圧による $P_{Left}^{(0)}, P_{Right}^{(0)}$ と、没水部に働く三角形分布の静水圧による $P_{Left}^{(\gamma)}, P_{Right}^{(\gamma)}$ の和で求まる。ここに、2 章と同じく、大気圧を p_0 、水の比重量を γ とすれば、

$$\left. \begin{aligned} P_{Left} &= P_{Left}^{(0)} + P_{Left}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) + \frac{1}{2} \gamma f^2 \\ P_{Right} &= P_{Right}^{(0)} + P_{Right}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) + \frac{1}{2} \gamma f^2 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(21)$$

となつて、左右両舷に働く力は等しいことから、

$$\left. \begin{aligned} P_{Left} &= P_{Right} (\equiv P_{Side}) \\ P_{Left}^{(0)} &= P_{Right}^{(0)} (\equiv P_{Side}^{(0)}) \\ P_{Left}^{(\gamma)} &= P_{Right}^{(\gamma)} (\equiv P_{Side}^{(\gamma)}) \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(22)$$

のように、それぞれ下添字 *Side* で共通表記したものである。

一方、甲板 (*Upper*) に働く力 P_{Upper} は、大気圧による $P_{Upper}^{(0)}$ のみで、底面 (*Lower*) に働く力 P_{Lower} は、大気圧による $P_{Lower}^{(0)}$ と、静水圧による $P_{Lower}^{(\gamma)}$ の和で求まるから、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} P_{Upper} &= P_{Upper}^{(0)} \\ &= p_0 \cdot 2b \\ P_{Lower} &= P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)} \\ &= p_0 \cdot 2b + \gamma f \cdot 2b \\ &= P_{Upper}^{(0)} + 2 \gamma f b \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(23)$$

となる。

3.2 y 方向と z 方向の合力 F_y, F_z

前節の(21),(23)式から、水平成分の F_y と、鉛直成分の F_z を求めてみると、

$$\left. \begin{aligned} F_y &= P_{Left} - P_{Right} \\ &= 0 \\ F_z &= P_{Lower} - P_{Upper} \\ &= P_{Lower}^{(\gamma)} = 2 \gamma f b \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(24)$$

のように、圧力積分による合力として、水平成分 F_y は生じないことが分かる。鉛直成分 F_z については、

$$F_z = \gamma \cdot (2b \cdot f) \\ = \gamma \cdot (\text{水面下の矩形の面積}) = \text{浮力} \cdots (25)$$

のように書いて、Archimedes の原理⁽¹⁾が教える通りの浮力である。

3.3 $-\eta$ 方向と ζ 方向の合力 $F_{-\eta}$, F_ζ

θ だけ回転した座標系の $-\eta$ 及び ζ 方向に働く合力 $F_{-\eta}$, F_ζ は、(21),(23)式を用いて、

$$\left. \begin{aligned} F_{-\eta} &= -P_{Left} \cos \theta + P_{Right} \cos \theta \\ &\quad - P_{Upper} \sin \theta + P_{Lower} \sin \theta \\ &= 2\gamma f b \sin \theta = F_z \sin \theta \\ F_\zeta &= P_{Left} \sin \theta - P_{Right} \sin \theta \\ &\quad - P_{Upper} \cos \theta + P_{Lower} \cos \theta \\ &= 2\gamma f b \cos \theta = F_z \cos \theta \end{aligned} \right\} \cdots (26)$$

のように、共に大気圧 p_0 は相殺して求まり、 $F_{-\eta}$

は浮力 F_z の正弦成分、 F_ζ は浮力の余弦成分であることが分かる。

3.4 o 点回りのモーメントの計算

η 方向に働く力による、 o 点回りの反時計方向のモーメント M_η は、(21),(23)式それぞれの力に対するレバーを、図2の矩形内の細い破線を参照して求め、乗ずることにより、

$$\begin{aligned} M_\eta &= -P_{Left}^{(0)} \cos \theta \cdot \left\{ \frac{f+h}{2 \cos \theta} - \left(b + \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \sin \theta \right\} \\ &\quad + P_{Left}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot \left\{ \left(b + \frac{f}{3} \tan \theta \right) \sin \theta - \frac{f}{3 \cos \theta} \right\} \\ &\quad + P_{Right}^{(0)} \cos \theta \cdot \left\{ \frac{f+h}{2 \cos \theta} + \left(b - \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \sin \theta \right\} \\ &\quad + P_{Right}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot \left\{ \left(b - \frac{f}{3} \tan \theta \right) \sin \theta + \frac{f}{3 \cos \theta} \right\} \\ &\quad - P_{Upper}^{(0)} \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta \\ &\quad + (P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)}) \cdot 0 \cdots \cdots (27) \end{aligned}$$

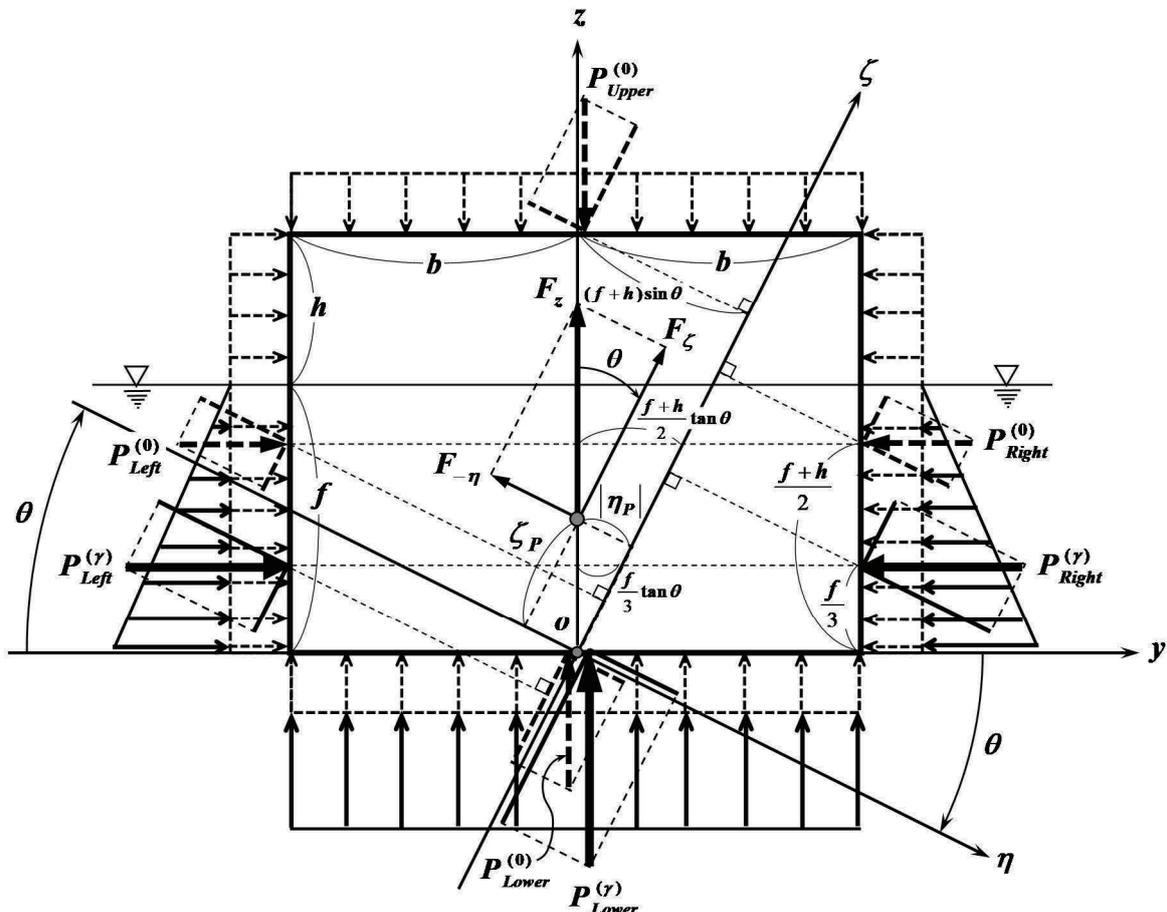


図2 直立した矩形断面に作用する静水圧の分布と座標系

のように計算できる. ここに, (22)式の関係を用いれば,

$$M_{\eta} = P_{Side}^{(0)} \cos \theta \cdot 2b \sin \theta + P_{Side}^{(\gamma)} \cos \theta \cdot 2b \sin \theta - P_{Upper}^{(0)} \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta \quad \dots\dots\dots(28)$$

のように整理され, M_{η} は,

$$M_{\eta} = p_0(f+h) \cos \theta \cdot 2b \sin \theta + \frac{1}{2} \gamma f^2 \cos \theta \cdot 2b \sin \theta - 2 p_0 b \sin \theta \cdot (f+h) \cos \theta = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(29)$$

のように求まる. 式中, $P_{Side}^{(0)}$ に関する第 1 項と $P_{Upper}^{(0)}$ に関する第 3 項は相殺し, $P_{Side}^{(\gamma)}$ に関する第 2 項によって定まったことになる.

ζ 方向に働く力による, o 点回りの時計方向のモーメント M_{ζ} は, (27)式と同様, (21),(23)式それぞれの力に対するレバーを乗ずることにより,

$$M_{\zeta} = P_{Left}^{(0)} \sin \theta \cdot \left(b + \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Left}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot \left(b + \frac{f}{3} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Right}^{(0)} \sin \theta \cdot \left(b - \frac{f+h}{2} \tan \theta \right) \cos \theta + P_{Right}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot \left(b - \frac{f}{3} \tan \theta \right) \cos \theta - P_{Upper}^{(0)} \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta + (P_{Lower}^{(0)} + P_{Lower}^{(\gamma)}) \cdot 0 \quad \dots\dots\dots(30)$$

のように計算できる. ここでも, M_{η} と同様, (22)式の関係を用いれば,

$$M_{\zeta} = P_{Side}^{(0)} \sin \theta \cdot 2b \cos \theta + P_{Side}^{(\gamma)} \sin \theta \cdot 2b \cos \theta - P_{Upper}^{(0)} \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta \quad \dots\dots\dots(31)$$

のように整理されるから, M_{ζ} は,

$$M_{\zeta} = p_0(f+h) \sin \theta \cdot 2b \cos \theta + \frac{1}{2} \gamma f^2 \sin \theta \cdot 2b \cos \theta - 2 p_0 b \cos \theta \cdot (f+h) \sin \theta = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(32)$$

のように得られる. 式中, M_{η} と同様, $P_{Side}^{(0)}$ に関する第 1 項と $P_{Upper}^{(0)}$ に関する第 3 項は相殺し, $P_{Side}^{(\gamma)}$ に関する第 2 項によって求まり, 大気圧 p_0 には依らない.

結果として, (29),(32)式から,

$$M_{\eta} = M_{\zeta} = \gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta \quad \dots\dots\dots(33)$$

のように, M_{η} と M_{ζ} は, 同値である.

3.5 矩形断面の圧力中心 C_p の位置決め

3.3 節(26)式で求めた $F_{-\eta}$, F_{ζ} と, 3.4 節(29), (32)式で計算した M_{η} , M_{ζ} を用いて, 2.4 節と同様, 水理学の手法⁽¹⁷⁾に基づいて, 静水圧による圧力中心 C_p の位置を決定する.

静水圧による o 点回りのモーメント M_{η} , M_{ζ} は, それぞれ $C_p(\eta_p, \zeta_p)$ に作用する合力 $F_{-\eta}$, F_{ζ} によって,

$$\left. \begin{aligned} M_{\eta} &= F_{-\eta} \cdot \zeta_p \\ M_{\zeta} &= F_{\zeta} \cdot |\eta_p| \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(34)$$

のように計算できるから⁽¹⁷⁾, o 点から圧力中心 C_p までの $-\eta$, ζ 方向の距離 $|\eta_p|$, ζ_p は, それぞれ,

$$\left. \begin{aligned} |\eta_p| &= \frac{M_{\zeta}}{F_{\zeta}} \\ &= \frac{\gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta}{2 \gamma f b \cos \theta} = \frac{f}{2} \sin \theta \\ \zeta_p &= \frac{M_{\eta}}{F_{-\eta}} \\ &= \frac{\gamma f^2 b \sin \theta \cos \theta}{2 \gamma f b \sin \theta} = \frac{f}{2} \cos \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots(35)$$

のように, 決定できる.

この θ だけ回転した座標系の (η_p, ζ_p) を, 元々の座標の (y_p, z_p) に変換すると,

$$\left. \begin{aligned} y_p &= \zeta_p \sin \theta - |\eta_p| \cos \theta \\ &= \frac{f}{2} (\cos \theta \cdot \sin \theta - \sin \theta \cdot \cos \theta) = 0 \\ z_p &= \zeta_p \cos \theta + |\eta_p| \sin \theta \\ &= \frac{f}{2} (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) = \frac{f}{2} \end{aligned} \right\} \dots\dots(36)$$

のように計算され,

$$(y_p, z_p) = \left(0, \frac{f}{2} \right) \dots\dots\dots(37)$$

となり，大気圧 p_0 に依存することなく，矩形の図心として求まる⁽²⁾．これによって，静水圧による圧力中心 C_p が，周知の浮心位置 B と一致することを，座標系を θ だけ回転させることによって，証明できた．

4. おわりに

第1報（矩形断面⁽²⁾），第2報（任意の断面形状⁽¹⁰⁾）に続いて，半没円柱に対しても，静水圧の圧力中心が，周知の浮心位置（半円の図心）に一致することを，証明した．

半没円柱の場合，横傾斜させても水面下の幾何学的形状が変化しないことから，結果的に，座標系を鉛直方向からズラすように回転させることによって，圧力中心の位置決めができるという，藪下⁽¹³⁾の主張を例証した．

それを踏まえて，矩形断面の場合に対しても，第1報⁽²⁾とは別の証明として，直立状態のまま，座標系を回転させる手法で，圧力中心の位置決めが行なえることも示した．

謝辞

本稿のテーマに関して，幾多の有益なご討論やご教示を頂いた，防衛大学の鈴木 勝雄 名誉教授⁽¹⁴⁾，藪下 和樹 准教授⁽¹³⁾，舟艇協会の小松 正彦 評議員⁽¹⁵⁾に，篤く御礼申し上げます．

本研究を進めるに当たり，いつも身近に居て，常日頃から，温かいご激励や有益なご議論を下さった，（有）実用技術研究所の慎 燦益 所長⁽⁹⁾と，長崎総合科学大学の林田 滋 名誉教授に，心より御礼を申し上げ，本稿を閉じます．

参考文献

(1) ARCHIMEDES : The Works of Archimedes , On Floating Bodies, Book I & Book II, Edited and Translated by T. L. HEATH, Cambridge University Press, pp.253~300, 1897.

(2) 堀 勉：静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — 浮心=圧力中心の証明 —，日本航海学会誌，第 203 号，pp.90~94，2018 年 1 月．

(3) 小松 正彦：浮体に働く浮力の作用中心に関する考察，舟艇技報，No.93，pp.21~25，2007 年 12 月．

(4) 瀬戸 秀幸：「浮心」考 — 小松：浮体に働く浮力の作用中心に関する考察の再検討 —，第 14 回推進性能・運動性能合同研究会，2010 年．

(5) 瀬戸 秀幸：浮力の作用中心に関する一考察，日本船舶海洋工学会 講演会論文集，第 12 号，pp.529~532，2011 年 5 月．

(6) 鈴木 勝雄：神説「浮心の法則」，2011 年 1 月．

(7) 小松 正彦：座標変換による浮力の作用中心に関する考察，第 19 回推進性能・運動性能合同研究会，2012 年．

(8) 渡辺 倫堂：船体周りの圧力分布と浮心の関係に関する研究，防衛大学校 機械システム工学科 船舶工学講座 卒業論文，（指導）藪下和樹，岡畑 豪，pp.1~25，2013 年 3 月．

(9) 慎 燦益：造船幾何学 — 造船設計の基礎知識 —，第 4 章 排水量等計算と曲線図，4.2 アルキメデスの原理，海文堂，pp.125~133，2013 年 2 月（初版）．

(10) 堀 勉：静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その 2：任意の断面形状の場合 —，日本航海学会誌，第 205 号，pp.28~34，2018 年 7 月．

(11) 一色 浩：Pressure Center，2018 年 3 月．

(12) 藪下 和樹：船舶の復原及び推進性能(2018 年度版)，第 4 章 浮力と圧力分布の関係，防衛大学校 機械システム工学科 テキスト，pp.81~90，2018 年 4 月．

(13) 藪下 和樹，日比 茂幸，岡畑 豪：物体周りの圧力分布による浮心位置の同定，第 10 回推進・運動性能研究会，pp.1~14，2018 年 6 月．

(14) 鈴木 勝雄：見かけの浮心について — 堀論文⁽²⁾に関連して —，2018 年 4 月．

- (15) 小松 正彦：浮体に働く浮力の作用中心に関する考察（続報），舟艇技法，第 136 号，pp.12～18，2018 年 12 月．
- (16) 堀 勉：「浮体静力学」の基礎理論に対する新展開 — その 1：「浮心＝圧力中心」の証明 —，舟艇技法，第 135 号，pp.1～10，2018 年 9 月．
- (17) 大串 雅信：理論船舶工学（上巻），1.3 浮力の例題，海文堂，pp.4～5，1971 年 6 月（初版）．

平成 31 年 2 月 8 日 投稿



ホリ
堀 ツトム
勉

正会員 長崎総合科学大学 工学部 船舶工学コース 教授（☎851-0193 長崎市 網場町 536）
E-mail : HORI_Tsutomu@NiAS.ac.jp, HomePage : <http://www.ship.nias.ac.jp/personnel/horiken/>
1987 年 大阪大学 大学院 工学研究科 造船学専攻 博士後期課程 修了，工学博士
所属学会：日本航海学会，日本船舶海洋工学会の各会員； 研究テーマ：水面波動力学

日本航海学会誌 NAVIGATION

平成31年4月 第208号

APR 2019 No. 208

追悼

故 日本航海学会元会長 東京商船大学名誉教授 庄司 和民 (しょうじ かずたみ) 先生…………… (1)

巻頭言

主務幹事雑感 / Miscellaneous Impressions from Competent Manager…………… 南 清和 / Kiyokazu MINAMI … (2)

特集

操船シミュレータ研究会特集号に寄せて / Foreword for Feature Articles on the Ship-handling Simulator Committee…………… 内野 明子 / Akiko UCHINO … (3)

インストラクター技能養成のためのモデルコース / Model Course for Instructors of Maritime Education and Training Certified by Class NK

…………… 操船シミュレータ研究会 / Ship-handling Simulator Committee … (4)

船舶の自律化システム開発に向けての提言 / Issues on Full-Automation of Ship Handling…………… 小林 弘明 / Hiroaki KOBAYASHI … (30)

事業所紹介

海上交通センターの業務と機能等について / The services and the functions of Vessel Traffic Service center

…………… 海上保安庁交通部航行安全課 / Japan Coast Guard Maritime Traffic Department Navigation Safety Division … (44)

株式会社 MTI の紹介 / Introduction of MTI Co., Ltd. ……………… 安藤 英幸・柴田 隼吾 / Hideyuki ANDO and Jungo SHIBATA … (51)

研究室紹介

日本大学法学部 商法・海事法研究室 / Nihon University, College of Law The Laboratory on Commercial Law and Maritime Law…………… 南 健悟 / Kengo MINAMI … (55)

研究・調査

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その3 : 半没円柱に対する証明 —

/ A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 3 : The Proof for Semi-submerged Circular Cylinder —

…………… 堀 勉 / Tsutomu HORI … (60)

報告

海事三学会合同シンポジウム 海事分野におけるイノベーション / A report of the 4th Joint Symposium of JASNAOE, JIME and JIN Innovation in Maritime Industry

…………… 國枝 佳明 / Yoshiaki KUNIEDA … (69)

日本航海学会論文集 Vol. 139 (2018) 目次…………… (73)

事務局だより…………… (75)

投稿要領…………… (77)

日本航海学会

Japan Institute of Navigation

c/o Tokyo University of Marine Science and Technology, 1-6, Etchujima 2, Koto-ku, Tokyo, 135-8533 JAPAN